

## 日本メソヂスト教会社会事業史の試み

塩入 隆

日本メソヂスト教会は 1907 年に、美以教会（在日本米メソヂスト監督教会）、日本メソヂスト教会（在日本カナダメソヂスト教会）、南美以教会（在日本米南部メソヂスト監督教会）が合同して出来た教会である。したがって、1907 年以前は、三派それぞれ毎の研究が必要であるが、本論では合同以後の「日本メソヂスト教会」の社会事業を対象に論じてみたい。

在日本のメソヂスト教会三派は、合同によってそれぞれの母教会を離れて、独立の日本メソヂスト教会として創立されたが、財政的には米国とカナダのメソヂスト教会の支援を、日本基督教団創立の動きの始まった第二次世界大戦の前夜まで受けていた。

また、宣教師は三派合同以後も派遣されてきていて、その宣教担当地域も従前と同一であった。即ち、東北・関東は美以教会系、甲信越・中部（静岡を含む）はカナダメソヂスト教会（後カナダ合同教会）系、関西は南美以教会系の宣教師がそれぞれワークシェアしていた。北海道は明治初年から函館・札幌中心に美以教会が伝道したが、明治 30 年に日本メソヂスト教会（カナダメソ）が滝川に伝道地を開き、東京部会の所管としたが 4 年間の伝道で撤退した。

日本美普教会（メソヂストプロテスタント教会）は名古屋から東海道線の沿線沿いに伝道したので、メソヂスト教会は全日本的に伝道戦線のネットを張っていたことになる。

もっとも東京は別格で、来日した宣教団体は、ほとんどの教派が東京で伝

道した。例えば長野県の諏訪、伊那地方でしか伝道しなかったフィンランド福音ルーテル教会も東京で伝道している。

日本メソヂスト教会の伝道は、毎年開催される「東部年会」と「西部年会」で決定され、実施された。この年会は教職と信徒から選出された議員によって組織されたが、教職議員の中には在日宣教師も含まれていた。

しかし、年会で決定された年度予算の中にも、アメリカ・カナダからの宣教資金も入っていたが、宣教師は伝道を実施する際は、自身の母教会からの伝道資金を与えられていた。またミッションスクールと呼ばれる学校や幼稚園の運営資金もまた、日本メソヂスト教会の年度予算ではなく、母教会からの助成金で成り立っていた。

各個教会で牧師を助けて働いた婦人伝道師は、メソヂスト教会の特色の一つであるがその給料は、表面上は見えにくいのであるが、教会からは支出されずに宣教師の母教会に属する伝道団体—婦人伝道会社、婦人伝道協会—から支出されていた。（以後この団体を **Woman's Missionary Society=W・M・S** と記す）

学校の場合は卒業生や関係者からの寄付金に、ミッションの資金で校舎の建築等は為された。幼稚園の場合はピアノ 1 台の購入でも **W・M・S** へ申請し、予算化された上で入手している。社会事業の施設建築は、ほぼ学校等の教育施設の場合と同様ではあったが、その実態はそれぞれの施設の性格で、画一的ではない。

### 1. 社会事業の始まり

宣教師による宣教事業は、通称男子ミッション（母教会の直属伝道）と女子ミッション（婦人伝道会社=**Woman's Missionary Society**) の担当がはっきり区別されていた。この区別はまた資金の出所の違いでもあった。

東洋英和女学校 100 年史により孤女院（後永坂ホーム）の性格について記述してみたい。東洋英和女学校では生徒自身による宗教活動が盛んになり、王女会という (**King's Daughter's Society**) 学校や教会の力を借りず、生徒のみで貧民救済や未信者を導く奉仕活動を行う団体が誕生した。

これは米国に発祥した団体で、日本では **1888** (明治 **21**) 年に発足した東洋英和女学校の王女会が最初であった。王女会の会員は **10** 名を単位に活動したが、このチームを東洋英和ではサークルと呼んでいた。会員は毎日 **15** 分の時間を捧げて活動し、編物や裁縫で作った作品を販売して資金を造り、各種の社会福祉施設への献金に当てた。

王女会員は地域の日曜学校の教師として奉仕したが、特に貧困者の為の日曜学校は、教会の教育的伝道の範疇を脱して、貧困者救済の貧困者児童の為の教育機関へと発展していった。

その教育機関が「恵風学校」であり、**1894** (明治 **27**) 年頃に形を為してきたと推定されている。恵風学校は **King's Daughter's School** と呼ばれていたもので、まさに王女会の活動であった。明治 **32** 年にはこの学校に女子 **40** 人男子 **15** 人が学んでいる<sup>1</sup>。

恵風学校には主任教師として、学校卒業後ミッション関係で働いていた卒業生が任命されていた。小学校に通学できない貧民児童の為の私設小学校であったが、その教育水準は高く、恵風学校卒業後に東洋英和女学校に進学した児童もあったほどである。この学校は義務教育制度が整備されると共に衰退し、明治 **30** 年代の末には廃校された。

この王女会の活動の一環で、**1893** (明治 **26**) 年 **2** 月以降東洋英和女学校卒業生の吉田勇子が週日の午後に麻布地域で奉仕活動を始めた<sup>2</sup>。

この吉田勇子の活動がきっかけで、「恵風学校」で奉仕活動をしていた生徒達が、一人の少女を孤児院で養育することを計画した<sup>3</sup>。これが永坂孤女院の発祥となった。

この孤女院には **1894** 年には **13** 人の少女が収容され、恵風学校に通学していた。最初、この孤女院は麻布一本松に在ったと推測されるが、「東洋英和女学校 **50** 年史」によると **1904** (明治 **37**) 年 **12** 月に建物が建築され、建築資金 **1000** 円中 **500** 円を婦人伝道会社が、残りの **500** 円を在校生父母と卒業生が出資している。

**1908** (明治 **41**) 年 **11** 月に孤女院は麻布永坂町 **50** 番地に移転した。この土地はカナダミッション (男子ミッション) の所有地で講義所があった所であるが **W・M・S** に譲渡され、そこに **2** 階建ての建物が完成した。**1** 階は日曜

学校の校舎に、**2** 階が孤女院として利用され、永坂孤女院と呼ばれたのである。

この建物はカナダメソヂスト教会総会議長 (監督的地位) の名称を冠してカーマン・ホールと呼ばれていた。ここで幼稚園がコーツ夫人によって営まれ、この幼稚園と孤女院援助の為に同窓会が音楽会を開催し、王女会も活動写真会を開いて資金集めをしている。

**1911** (明治 **44**) 年 **10** 月 **4** 日の「キングストオターズ会記事」によると、佐野君子の葬儀に花輪一輪を贈った記事がある。貧しい開拓農民の子であった佐野君子は、美以教会の宣教師チャールズ・ヒューエット (**Charles Huett**) に引き取られ、函館、札幌で暮らした後、帰国する宣教師と共に米国に渡る事になった。しかし、結核を病んでいた佐野君子は乗船が叶わず、永坂孤女院に預けられここで召天したのである。この君子の母から経緯を聞いた野口雨情により、有名な「赤い靴」が書かれたのである。赤い靴の少女は異人さんに連れられて行ってしまったのではなく、若く愛に満ちた少女達に見守られて、その人生を終わったのであった。

金沢市の「金沢育児院」は日露戦争傷病兵の家族や遺児の生活困窮者に限って収容した施設で、**1905** (明治 **38**) 年にカナダ男子ミッションが設立し、主として **D・R** マッケンジー夫妻が経営に当たったものである。

この同時期に、静岡で始められた日露戦争被害児救済の孤児院が「静岡ホーム」である。創立者は **EMBERSON ROBERT** であった。彼は **1866** 年 **2** 月にオンタリオ州の **Peterborough county** に生まれ、カナダメソヂスト教会の大學 **Victoria** で学び、按手礼を受けた。**1900** 年に来日し静岡に赴任した。**1909** 年まで働きこの年の **12** 月に帰国した。

創立は **1907** (明治 **40**) 年 **4** 月 **5** 日であった。三年後の **1910** 年に静岡市井宮町 **183** 番地に移転している。**EMBERSON ROBERT** が参画したのは創設時で、彼の帰国後にホームは前記の場所に移転した。所属はカナダメソヂスト教会宣教師社団であり、メソヂスト三派合同後も、カナダメソヂスト教会の運営する施設であった。

孤貧児救済育児と託児の施設は、当初の日露戦争による孤児の救済の目的が終わっても、貧窮児の収容の仕事が続けた。運営は困難であったが、昭和

五年五月に天皇が静岡県に行幸した際、侍従が差し遣わされ宮内省御内帑金が下賜されたので、諸官庁からも補助金が交付されるようになり、社会的な認知度も高まった。

1938年度の陣容は、総理一人、ホーム長一人の管理体制で、建物は九棟、敷地は五千二百坪で、孤児を収容する家庭部には七十三名の児童がいた。この孤児の他に昼間だけの託児があった。現在では乳幼児の保育で、保育園とナースリーの役割を果たしている。今日的に云えば零歳児保育に近いものである。

この託児事業は1929(昭和4)年の昭和天皇御大典記念(天皇即位式)として開始された事業である。地方では御大典記念で始められた保育園が多い。昭和大恐慌と重なる時期で、静岡ホームは恩賜財団慶福会の補助金で、この託児事業の施設を建設している。

1930年2月からは医療部を新設した。これはホーム周辺の貧困家庭の児童の施療と児童の健康相談を行った。創設者の出身地がPeterborough countyであるので、特に日露戦争に関心が深かったかも知れない。何も証拠が無いので、後考に俟ちたい。

このように教会の社会への奉仕の業であるこれら施設は、表面ではキリスト教の事業であるが、内面ではミッションの全面的支援のみではなく、施設独自で経営の工夫を行っている。

## 2. 社会事業の本格的開始

恵風女学校が始まり、永坂孤女院が存在を求められた時期は、日清戦争と日露戦争の時代であり、日本の産業構造が変化し社会問題が多発した。キリスト教者主導による労働組合が形成され、ストライキを含む労働運動が活発化した。

しかし、これらの労働運動や組合活動は、恵まれた職場の熟練工が主体で、都市の一角に住み着く日雇いやマッチ工場の労働者などは、逼迫した生活を送り、スラム街を形成していた。このスラム街の児童達の為に作られたのが、1900年に麹町に作られた「二葉幼稚園」で、貧民幼稚園の先駆的なものであ

った。

この幼稚園の設立者は、番町教会信徒の二人の若い華族女学校の教師であったが、現場で働いたのは東洋英和女学校出身の平野マチであった。詳細は「東洋英和女学校100年史」に譲るが、同時期の1898(明治31)年にカナダ婦人伝道会社は長野市にW・M・S最初の「旭幼稚園」を開設した。この通常の幼稚園経営の他に、婦人宣教師は2ヶ所の被差別部落の中に「無料幼稚園(free kindergarten)」を開設していた<sup>4</sup>。宣教師の視線の中には、生活に困窮する日本人が見えていたのである。

後述するが、明治末年からW・M・Sは女性労働者の教育と、女性労働者個人の指導と支援、女性寄宿舎の必要を感じて、亀戸方面で活動を始めた。

明治末年の冬の時代を経て、第1次世界大戦は日本に未曾有の経済発展をもたらした。大正の天佑と呼ばれるバブル期が出現した。大正デモクラシーという自由な発言や社会運動が許される風潮となり、社会的発展を踏まえて高等教育の拡大や、中等教育の量的発展が始まった。日本にサラリーマンと呼ばれる階層が誕生してきたのであるが、バブルがはじけてそこへ関東大震災が襲い来て、都市の下層民は更に生活の重圧を感じる状況となった。

東京のスラム街は縮小するどころか拡大し、東京の下町の下層民の生活は悲惨な状況を呈した。日本メソヂスト教会はこの状況を直視し、日暮里、吾嬬町、亀戸方面に伝道やセツツルメントを展開した。

カナダメソヂスト教会派遣宣教師サンビー(Saunby John William)<sup>5</sup>は1887(明治20)年にイビー宣教師の提唱に応えて、自給宣教師(Self Supporting Band)の一員として来日した。山梨県甲府の公立中等学校に籍を置き伝道し、ほどなく金沢に移り金沢部(現在の日本基督教団の教区機能にほぼ相当)の部会長を3カ年勤め、1893(明治26)年カナダに帰国し、カナダ中部のマニトバ州とオンタリオ州の諸教会を牧会した。1910(明治43)年にいって、サンビーは再び来日した。

### 1) 愛隣団

再来日のサンビーはこの度は地方に出ないで、東京の下町で伝道に従事した。下町地区の日暮里・亀戸・吾妻町の地域社会事業センターを統合し、「東京東部伝道教区」という新しい伝道と社会事業組織を設立した。制度的には東京東部部会に属する伝道であったが、教会の伝道活動とは別に、伝道とセツルメントを実施する一種の社会教区として位置づけたのである。

サンビー以前に日本メソヂスト教会の伝道は、東京府の下町地域で対困窮者事業を教会の業として実施していたのであるが、現在その伝道の全容を明確にすることが出来ない。浅草講義所は美以教会の宣教師とパイプのある教会であったが、**1918**（大正 **7**）年は宣教師 **E.T.**アイグルハートが主任で、補助の平伊之助が貧民への支援と伝道を行っていた。その後は **G.E.**ドレーパー、**FW.**ヘッケルマンなど青山学院で教鞭を執った宣教師が主任で、日本人では真鍋頼一が長年担当し、**1925**年に浅草教区が置かれて浅草教会牧師に真鍋頼一が任命され、同時に浅草ミッションが建てられ主任に **FW.**ヘッケルマンが任じられている。教会と同時にセツルメントが行われていたのである。

亀戸講義所の大井蝶五郎（教職試補）は、伝道と共にスラム街の人々を援助する活動を行った事は、「カナダメソヂスト教会伝道概史(p.205)」が記すところである。

**1920**（大正 **9**）年、サンビーは東京東部伝道教区の活動として愛隣団を設立した。日暮里の金杉 **1604** 番地の **2** 階屋を借り受けて、早春の **2** 月に活動を開始したが、当初は生活困窮者への救済活動をする「救済部」と小学校であった。

同 **1920** 年秋 **9** 月には、日暮里金杉 **1592** 番地で夜間の無料診療所を開設した。事業開始直後に、病を得たサンビーは、故国カナダのオンタリオに帰国した。

**1920** 年の東京東部伝道教区の伝道者任命表では

東京東部伝道教区 主任 ジョン・ダブリュー・サンビー  
 亀戸講義所 補助○大井蝶五郎 筆者註：○印は新任  
 請地出張所 (同人)

日暮里出張所 (同人)

**1921** 年の東部年会で、亀戸講義所の資格進級の件が計られた。この年の伝道者任命は

東京東部伝道教区 主任 ジー、ピー、プライス  
 亀戸講義所 大井蝶五郎  
 請地出張所 (同人)  
 日暮里出張所 (同人)

であり、主任の交代以外は相変わらず教職試補の大井蝶五郎が牧会している。

**1922** 年は

東京東部伝道教区 主任 ジー、ピー、プライス  
 亀戸教会 ○佐藤春吉  
 請地出張所 (同人)  
 根岸教会 ○松岡宏一  
 日暮里出張所 大井蝶五郎

と陣容が強化され、後述する根岸会館の教会として根岸教会が伝道教区に編入されている。この年の東京部部会長小方仙之助の部会報告によると

亀戸教会は伝道開始以来三年目にて昨年会にて補助教会の資格を認められたる新教会なり当地伝道開始以来大井蝶五郎兄全力を注がれ僅々二カ年間の伝道にて一教会を組織せられたるは主の大なる恩寵は勿論なれども大井兄の熱心なる働き又与って力ありと言うべし全氏は数ヶ月前小林弥太郎氏経営の下に日暮里に開始せられたる愛隣団と称する種々の社会事業を行う団体に働く事となり亀戸教会の方は単に折々主張伝道をせられるに過ぎず依って今回は是非とも亀戸へ適任者を任命せられたし。「日本メソヂスト教会東部年年会記録 **1922**」

教会が伝道牧会の立場で片手間でやり得る次元を超えているわけで、セツルメントには専任者が必要になって来たのである。

## 2) 根岸会館の活動

a) 隣保館

病気で帰国したサンビーの後任は、金沢で伝道していたプライス (Price.Percival Gardiner<sup>6</sup>) であった。プライスはカナダオンタリオ州生まれで、カナダメソヂスト教会のビクトリア大学を出て按手札を受け、日本に赴任し、休暇を挟んでビクトリア大学で修士号を取得している。

金杉で活動を開始したプライスは、小林弥太郎の援助を受け、金杉 1502 番地に 220 坪の土地を購入し、染め物工場であった空き家屋を改修し、救済部・教化部・小学部・診療部を置き、伝道とセツルメントの拠点とした。この建物が隣保館と呼ばれたものである。初代の隣保館主事は大井蝶五郎牧師であった。

この隣保館の活動は、サンビーの活動の発展的展開であり、初めて自前の建物を持ったのである。これには多額の経費を要した。1922 年の「東部年会」年会記録中の財務局報告に次のようにある。

	教会別	事業別		価格又ハ工事費
東京部	根岸	事業社会事業(貧民学校,託児所)	其他	20,000.00 個人寄付
		土地	購入	35,000.00 同
		建物	新築	16,000.00 同
	日暮里	土地	購入	12,000.00 同
		社会事業(貧民学校,託児所)	其他	18,000.00 同
	本郷	図書館	新築	10,000.00 同

年会記録は青山学院史料センターが所蔵している。

費用の全ては小林弥太郎の個人寄付であり、小林弥太郎は<sup>7</sup>根岸と日暮里の事業の為に、10 万 1 千円を寄付している。更に本郷中央会堂の図書館の為に 1 万円を捧げているのである。如何に財産家であるにしても、実に多額の捧物である。

1922(大正 11)年 5 月からは隣保館の事業として授産工業部を設け、授産事業を開始した。授産の職種はセルロイド加工で、加工工場を運営した。また

この年には小学校が正式に東京府の認可を受けた私立学校となり「愛隣小学校」と名乗った。

また愛隣小学校の付帯事業として夜間の「裁縫学校」を始めたが、このセツルメントで働いた三隅達郎によれば、当時としては珍しい「シンガーマシンを 10 台備え付けていた、すべて小林さんの援助によるものであった」と、その著『キャンプに生きる』で記している。

1923 年の東部年会の伝道者任命表では

東京東部伝道教区 主任 ジー、ピー、プライス  
 亀戸教会 佐藤春吉  
 請地出張所 (同人)  
 根岸教会 伝道師○山口菊太郎  
 日暮里出張所 大井蝶五郎

の配置であった。信徒身分の山口が根岸教会を担当している。

この年、診療部はボランティア医師の夜間診療から、医師が常駐する昼間診療の医院として、本格的な医療事業を始めた。隣保館の事業は着々と進み、1923(大正 12)年 6 月から隣保館の建物を改築していたが、9 月 1 日の関東大震災で一部を残して被災してしまった。

隣保館は残った建物をフル活用し、被災者を収容保護し、根岸会館の庭に大天幕を張って罹災者を一時収容した。カナダメソヂスト教会と有志の支援でこの会館焼失という困難な事態に対処し、隣保館の再建に着手した。再建工事は 1924 年 2 月に完了した。困難な隣保館再建は伝道者のメンバーを欠いたまま行われている。この年の東京東部伝道教区は

東京東部伝道教区 主任 ジー、ピー、プライス  
 亀戸教会 追 補  
 請地出張所  
 根岸教会 伝道師山口菊太郎  
 日暮里出張所 大井蝶五郎

大井蝶五郎は試補 4 年目で、神学校卒業直前であった。メンバーを欠きながらプライスと協力者小林弥太郎の援助で再建作業を行ったのである。

授産部は建物再建を機にセルロイド加工工場を閉鎖し、刷毛細工を始めた。

事情は不明であるが、設備と需要と供給の問題であると推定できる。1924年の東京東部伝道教区では、亀戸教会の佐藤春吉が留学したので牧師不在となり、山口と大井が事業を担ったわけであるが、関東大震災の被災状況は、年会での東京部会長の報告によれば、根岸教会では被災信者家族は 30 戸、浅草教会では 60 戸に及んでいた。

日暮里愛隣団大井蝶五郎兄は説教及牧会を勤むる外彼地に居住する数多の貧民を絶えず見舞悲む者を慰め乏き者を賑し病める者を助けて主の御聖意を実地に行つて主の御栄光を現して居らるゝは実に感謝の外はありません。「1924 年年会記録」

この 1924 年の東京部会長の年会報告から、愛隣団の働きの片鱗が見えて来ている。東部伝道教区は関東大震災にもめげずに、焼け跡から立ち上がっている。

更に 1925 年 4 月には愛隣小学校とは別に、児童部・児童図書館・社会教育部が新設された。後述するが、愛隣団事業としての愛隣幼稚園は 1921 年 1 月から開設されていたので、児童部関係の活動は今日言うところの「学童保育」の役割を担った新事業がスタートしたのである。

隣保館は 1926 (大正 15) 年に至って、愛隣小学校の上部教育機関として「愛隣中学校」を開設し、翌 1927 (昭和 2) 年に東京府の認可を得て正式の中学校となった。スラム街はもとより地方都市や農村では、義務教育の小学校 6 年生を卒業すると、男はそのまま印刷工場等の小規模企業の職工や商店での小僧など、女の子は製糸工場紡績工場の女工に成るのが大半で、普通教育の中学校進学は少数であった。

愛隣中学校の教育内容はその詳細を明らかにする資料を持たないが、ミッションスクールと深い関係のあった宣教師の人脈は、スラム街においても中等教育を実施したのである。先述した東洋英和女学校が関連していた「恵風学校」や「永坂孤女院」の卒業生の中から、奨学金を得て東洋英和女学校へ進学した児童もあったことから、この愛隣中学校も多額の賛助金が投入されて運営された事を想定しなければ、学校像を描くことが出来ない。

この愛隣団事業に附随して設立されたのは日暮里教会であり、愛隣団主事として高北義雄が奉仕した。

## b) 根岸会館

根岸会館は、1920 (大正 9) 年 12 月の P・G・プライスの着任でプライスと小林弥太郎の出会いから始まった事業である。愛隣団と同様に、在日カナダメソヂスト教会宣教師団と日本メソヂスト教会東京東部伝道教区 (英語流では東部ミッション) 管理下に始まった。

当初は愛隣団の名称を冠する事業であったが、関東大震災後に根岸会館と改称された。日暮里金杉の地から、下谷区下根岸 106 番地の小林弥太郎の別邸に事業が移された。

豊かな資産家に生まれた小林弥太郎は、関西学院神学部教授のウェンライト (Samuel Hayman Wainright) に連れられてアメリカに渡り、ニュー・オルレアンスのチュレイン (Tulane University) 大学に学んだ。渡米の年の 1905 (明治 38) 年 2 月にメソヂスト教会で洗礼を受けた。

砂糖問屋の小林弥太郎は、根岸に親譲りの別荘を持っていたが、使用していなかったこの別荘を、土地と共にカナダ宣教師団に寄付した。別荘は広い庭の奥に和風の堂々たる玄関を持ち、庭には池があり老松があり、門の脇には管理人の為の小屋があったという。

この別荘跡地に洋館 2 階建て、4 間×5 間の建物を新築し、前述したように 1921 年 1 月に「愛隣幼稚園」を開始した。保育は要望が多く、1 日 2 回の保育形態をとったが、東京府の認可を得た通常の保育園であった。幼稚園だけではなくこの場所で日曜日には「日曜学校」が開設されている。教会と連動した教育で、多くのミッション系の幼稚園と同一の運営形態であった。最初は幼稚園児のみの日曜学校であったが、後には地域の子供も参加する日曜学校となっている。

この建物を利用して、1921 年 3 月には「英語学校」を開設し、地域の女性や工場労働者を対象の教育と伝道が為されていた。下根岸には授産事業ではなくもう少し高度な職能教育の需要があったのである。

ところが 1923 (大正 12) 年 9 月 1 日の関東大震災で、根岸会館は全焼してしまった。東京府の援助でバラック 3 棟を建て、1 ヶを教会、1 ヶを幼稚園、もう 1 ヶを被災者の宿泊所に当てた。混乱時にも奉仕の精神を失わな

った姿勢が見える。

1925年はPG.プライスが休暇で帰国し、主任に初めてE.G.バットが就任し、日暮里講義所の大井蝶五郎が再び亀戸教会牧師となった。

東京東部伝道教区 主任 E.G.バット

亀戸教会 ○ 大井蝶五郎

請地出張所 (伝) 前川 清 註 (伝) は伝道師

根岸教会 (伝) 山口菊太郎

日暮里出張所 ○(伝) 橋本幸太郎

愛隣団の陣容は強化されたのであるが、根岸会館は根岸教会が支える働きで、信徒伝道師の山口がその任に当たり、後に吾嬬伝道所となる請地出張所にも働き人が派遣された。

この年の教勢は、日暮里出張所の正会員は29名で内成年者は16名、根岸教会は正会員36名内成年者12名、亀戸教会は正会員64名内成年者20名であった。各教会伝道所とも成人前の若い信徒が多かった事を示している。その正会員数は少ないが根岸教会の被割賦金は571.67銭で、四谷教会に比肩する財力を持ち、熊谷教会の被割賦金の約2倍であった。

根岸会館の再建が成ったのは1927(昭和2)年5月であった。鉄筋コンクリート4階建ての堂々たる建物であった。この建物で「愛隣幼稚園」と「英語学校」、また児童図書館、児童遊園が行われている。この建物建設と同時に「英語学校」は東京府の認可を受けた。

根岸会館の活動は更に広がり、1927年6月には根岸和服裁縫女学院を開設し、翌年の1928年4月には児童英語学校を開き、1929(昭和4)年9月には少女部を、1931(昭和6)年9月に少年部を設置した。

世界大恐慌が世界を覆い、満州事変が始まって日本が国際連盟を脱退し、時代は戦争色を深めてきた中で、1934年1月に児童英語学校は廃校された。しかし、地域の要望もあったことからか、翌1935(昭和10)年4月には児童復習学校を開始した。

一方、根岸和裁縫女学院は新たに洋裁科を加えて、根岸和洋裁女学院と改称した。昭和4~5年に始まった昭和大恐慌の社会は、満州事変・日中戦争の中で軍事工業が徐々に興隆して行く中で、景気は回復の様相を呈してき

た。これは社会奉仕の現場でも問題の変質を引き起こしてきた。

YMCAで今日まで継承されている野尻湖等で行われている日本の組織キャンプ(長期キャンプ)の父とも言うべき小林弥太郎は、1924(大正14)7月に愛隣団・根岸会館に集まる若者を対象に、千葉県房総線太海から見える仁右衛門島でキャンプを実施した。その後は毎夏、館山海岸、多摩川、富士山麓深良村をへて、1931(昭和6)年に千葉県竹岡村(現西房線竹岡駅近郊)に愛隣団竹岡キャンプを建設した<sup>8</sup>。

愛隣団竹岡キャンプは食堂と4棟の小屋が最初に造られ、その後は1932年に2戸、1933年には更に4戸が建造され、便所、本部、医務小屋、博物館棟が建増された。収容人員は定員80名であった。

少年少女部を中心に、1933(昭和8)年8月に第1回夏季キャンプが竹岡で開催された。和洋裁女学院も1934年に第1回の夏期学校を竹岡キャンプで行っている。

また、根岸会館と連動した教会は根岸教会で、1938年当時の牧師は小島貞彦であり、根岸会館主事は三隅達郎であった。三隅は後に東京YMCA主事となり、小林弥太郎に深く信頼され、YMCAのキャンプ事業を推進した人である。

### 3. 愛清館

愛清館によるセツルメント事業は、日本メソヂスト教会の事業ではあるが、資金と人材はW・M・Sの主催する事業であった。麻布の東洋英和女学校を拠点としたカナダ婦人伝道会社所属の婦人宣教師達は、山手の上流階級の子女ばかりを相手にしたのではなく、東京府江東の工場地帯で働く女性工場労働者(昔は女工といった)の為に、娯楽と慰安の場所を提供し、福音伝道を行う構想を持っていた。

1909(明治42)年秋に(宣教師の事業は夏休み中にカンファレンスが行われ、秋口から実施されるのが通例であった)一工場がカナダ婦人ミッションの構想を受け入れたので、集会が始まった。

この活動で女性労働者の教育と、女性労働者個人の指導と支援の必要があ

ることが明白になり、**1915**（大正**4**）年**9**月に亀戸柳島新地に借屋を借り受けて、愛清館というセツルメントの拠点を開設し、女子工員の安息の場を造った。

愛清館館長はミス・エー・アレン（**Annie Whitburn Allen**<sup>9</sup>）であった。メソヂスト教会の牧師の娘であった彼女は、大学を卒業して**W・M・S**に加入し、**1905**（明治**38**）年に来日した。**2**年間東洋英和女学院で日本語を学習する傍ら教育に当たり、**1907**—**1910**年まで甲府の山梨英和女学院、**1910**—**14**年は再び東洋英和女学院で教育宣教師（**Education**）として働いた。**1914**—**17**（大正**3**—**6**）年は教育ではなく宣教担当宣教師（**Evangelical**）となり、東京で伝道活動をした。

アレンが愛清館に関わったのは、愛清館誕生前夜の**1914**年からと、金沢勤務が終わった**1919**年から**1940**年の帰国時までであった。愛清館はアレンによってほとんど終始運営されたのである。

**1916**（大正**5**）年**3**月には女子工員の為の寄宿舎を開設し、そこで日曜学校も開始した。翌**1917**年**3**月には柳原砂原**360**番地に愛清館の敷地を購入し、**1920**（大正**9**）年**6**月に念願の会館新築に着手し**12**月に竣工したので、愛清館の全機能をここに移転した。

会館新築中の**1920**年**9**月から、愛清館は女子青年部を設けて「女子英語夜学校」を始め、女子のクラブも開設した。会館が落成した**12**月には人事相談部をおいた。愛清館に出入りする女子工員は、地方からの上京者も在ったが、学ぶ意欲も大変なもので、英語学校が成り立つ一方、その身の上相談やカウンセリングは重要で必要な事業であった。

**1921**年**11**月には児童部をおいた。また、児童図書室とクラブを開設し、地域の児童の生活の向上支援を行った。更に、働く女性のサポーターとして**1922**（大正**11**）年**9**月から愛清館保育園を開始した。この保育園に**35**名の園児が入園した。まさに幼児から成人女性までを対象とするセツルメントであった。

**1922**（大正**11**）**12**月、愛清館は新たに水上生活者教化部を設けた。東京の汚穢（大小便）を海上に運んで投棄する舟で暮らす人々に、援助と伝道を開始したのである。隅田川や荒川等に繋船している舟に出掛けて活動し、ク

リスマス等にはこれら水上生活者の子弟を招いてのクリスマス祝会を行っている。

**1923**年**9**月の関東大震災で、愛清館は被害を受けても建物は残ったので、本館、寄宿舎を一般罹災者に開放し、罹災者の当座の避難所とした。また臨時に医療部・配給部・授産部・廉売部・児童補習教育部・罹災者調査部を設置し、非常事態に対処した。さらに隣接の砂町に出張所を設け、罹災者と罹災による窮民の調査と救護事業を行った。

この震災の年の暮れ**12**月に、救済部を設けて罹災による窮民の支援に立ち向かった。また愛清館の女工寄宿舎を地域の一般職業婦人にも開放し、職業婦人のサポートを行っている。

翌**1924**年**7**月には罹災した児童の健康維持の為に、千葉の稲毛海岸で臨海学校を開き、**227**名の児童を**5**組に分けて、各組**7**日間づつのキャンプを行っている。都合**35**日間の大イベントである。男子ミッション関係では小林弥太郎の主導する教育キャンプがあったが、女子ミッションではそれと連動しないで、保健衛生上の臨海学校を開催している。

児童クラブの教育的価値と必要性は広く認められていたので、**1926**（大正**15**）**2**月に東京府社会事業協会の和田堀隣保館内に、児童クラブを開設してその運営に当たった。関東大震災以後行政とキリスト教セツルメントとの協力関係が随所で見られた。この児童クラブもその一環である。また、この児童クラブと同時に公立の松江小学校内でも児童クラブが始められた。この児童クラブを開始すると同時に、教会は府下松江町（松江小学校の学区内）で日曜学校を始めている。

同**1926**年**4**月、東京府吾嬬町の日本メソヂスト教会内（請地出張所）に「吾嬬保育園」を開設した。資金経営の一切は**W・M・S**の責任であった。この保育園は**1933**（昭和**8**）年**9**月に共励館の経営に移管された。ここ吾嬬町での活動は、後述する共励館の事業との関連が認められる。

また**1926**年**10**月に愛清館は、東京府砂町治兵衛**196**番地に出張所を設置した。震災時に開始した愛清館事業の砂町方面への本格的展開であり、**1934**年**4**月に砂町出張所に保育部をおいた。

**1928**（昭和**3**）年**1**月、愛清館は亀戸町**2**丁目**479**番地に**800**坪の土地を

購入して、新しい建物を建設した。6月から着工し2年後の1930（昭和5）年1月に竣工し、柳島砂町から亀戸2丁目に移転し、1933（昭和8）年6月には本館屋上に図書室と読書室を増築した。1933年8月に愛清館は財団法人の認可を受けた。認可時の事業内容を、「加奈陀メソヂスト教会伝道概史」から引用して掲げる。

#### 事業概況

1. 職業婦人寄宿舎
2. 保育部
  1. 保育園
  2. 幼稚園
3. 児童部
  1. 児童遊園
  2. 図書室
  3. 貯金会
  4. 児童クラブ
  5. キャンプ
4. 女子青年部
  1. 英語夜学部
  2. 裁縫夜学部
  3. クラブ
5. 宗教部
  1. 日曜学校
  2. バイブルクラス
  3. 修養会及び講演会
6. 人事相談及び救済部
  1. 一般人事相談及生活扶助
7. 労働婦人部

愛清館の館長はミス・A・W・アレーンがほとんど勤めた事は前述したが、アレーンを助けたのはミス・M・G・クレージで、語学校関係を担当したのがミス・J・グラハムであった。

この愛清館の運動を支援した教会は亀戸教会で、この教会の婦人伝道師として年会記録に出てくる人の住所は、愛清館内とあるので愛清館の働きも仕事であったと思われる。財団法人化された1937年の亀戸教会の牧師は佐藤春吉であった。

#### 4. 共励館

共励館は関東大震災の1年後の1924（大正13）年8月10日に設立されたものである。運営の主体はカナダメソヂスト教会宣教師社団であるが、教会独自の活動が設立の契機ではなく、東京府の依頼により建物の下付を受けて始まったのがこの事業の特色である。勿論、愛隣団、根岸会館、愛清館の震災罹災者救援活動のめざましい献身的奉仕を、東京府当局が評価していた事の結果である事には間違いない。

最初の事業は東京府提供の建物を使つての、労働者簡易宿泊所であった。これは「吾婦町労働館」と呼ばれたが、翌1925年には共励館と改称された。簡易宿泊事業は新しく始めたものであるが、吾婦町ではすでに幼児クラブの活動が伝道活動の一環として早くから行われていた。この幼児クラブを組織化し、前述のように愛清館が1926（大正15）年4月に「吾婦保育園」を教会の中で始めた。共励館の保育事業の一環でもあった。

1929（昭和4）年にいたり、東京府との5年間の契約期間が過ぎたので、この機会に共励館の活動の再検討を行った。罹災者の救済という当初の目的は終了したので、日本メソヂスト教会は吾婦町の事業を「隣保教化」を目的とするセツトルメントに切り替えた。

1929年11月日本メソヂスト教会は、東京近郊で行っている社会事業を統括する「日本メソヂスト東京社会事業連盟」を立ち上げた。日本メソヂスト教会は、この前後から農村伝道に力点を置き、農村福音学校事業を全国で展開した。この農村（農民）福音学校は、信仰の伝道場所だけではなく、農村（農民）と交わることで、生活改善事業に染手せざるを得なかった。

農民福音学校は日本メソヂスト教会に、社会事業・セツトルメントの重要性を浸透させていった。「メソヂスト時報」は月1回、1頁の「社会事業」の特集記事を組んでいる。

1933（昭和8）年5月、共励館は火災で全館が焼失した。共励館は直ちにバラックを建て事業を継続した。この年9月に愛清館が経営していた保育園を、共励館の事業の一部門とした。火災から6ヶ月、早くも会館再建に着手し、翌昭和9年3月に新会館は竣工した。

1937（昭和12）年5月25日財団法人の認可を受けた。吾婦保育園は同年

東京府より共励館吾孀幼稚園として東京府の認可を受けている。  
認可時の事業内容を、「加奈陀メソヂスト教会伝道概史」から再び引用して掲げると、次の通りである

事業概況

役員・顧問・監事	16名
職員	11名 奉仕者 11名
共励館吾孀幼稚園	在籍 80名
共励館保育学園	〃 5名
各種児童クラブ	〃 90名
児童復習学校	〃 116名
珠算学校	〃 90名
英語学校	〃 12名
裁縫学校	〃 10名
家政学校	(常設ニアラズ)
料理会	〃 11名
児童映画会	月1回 毎回 500名以上
児童健康貯金会	〃 18名
運動場	人員カゾヘズ
夏季事業	(夏季学校、キャンプ)
歳末事業	(慰問品配給、のし餅、古着販売)
地域一銭貯金会	加入者 四五世帯
払下品販売	利用者家族 四五世帯
人事相談	

共励館を支援し協働した教会は吾孀町教会で、1938年当時の牧師は諸岡鉄三、共励館主事は谷山貞夫であった。

5. 付記として「興望館」—メソヂスト派の立場から

本稿は日本メソヂスト教会の社会事業の概観を描くことが本旨であるので、興望館を取り上げる必要はないのであるが、関東大震災の直後からしばらく

はW・M・Sの所属機関になったので、ここに取り上げることとする。

記述する内容は筆者の執筆した「東洋英和女学院百年史」の記述につきるが、そのなかから興望館関係の記事を、ブラックモア—女性宣教師に限って述べることにする。

興望館関係では『興望館セツツルメントと吉見静江—その実践活動と時代背景』(2000年 社会福祉法人興望館刊)と『吉見静江—福祉に生きる』(瀬川和夫著、2001、大空社)の二冊が、瀬川和夫氏の執筆で出版されている。興望館史と言っても吉見静江に焦点があり、編纂に当たっては既に書かれた原稿があり、引用資料が編纂物に限られているので、執筆者の立場で言えば正確な意味での歴史叙述には成らなかったようである。

興望館史は成立の端緒を、日本基督教婦人矯風会外人部会の活動と記している。これは歴史的事実であるが、時の外人部会の活動家はミス・ブラックモア—であった。東洋英和女学校の校長を4度も勤め、新教各派のミッションスクールの高等科を統合して「東京女子大学」を開設するまでに持って行った立役者であり、壮大な規模を想定して各教派の委員を説得し今日の東京女子大の基礎を築き、開設後は理事長を務めたのが、ミス・ブラックモア—であった<sup>10</sup>。

興望館開設時にミス・ブラックモア—は東京女子大学の理事長の任にあり、多忙であったが、矯風会外人部会の人々と共に東京中のスラム街を視察し、その住民なかんずく女性の惨状を救うべく、会員有志と計って、託児と授産事業を提案したのである。時に、1919(大正8)年5月であった。

彼女は毎夏の避暑に利用していた軽井沢の別荘を3000円で処分し、その金を率先してこの事業の為に捧げたのである。篤志家の寄付もあり、本所松倉町62、3番地の土地を購入し、2階建ての家屋を借り受けて事業が始まった。

産室、洗濯場、浴室、読書室、裁縫室等を備えるべく増築工事中の1922年に大暴風雨の為、増築中の家屋が凡て倒壊し、2万円の損害が出た。

これに屈せず新築作業を再興し、1923年8月末に完工し、8月28日に竣工祝いをする予定であったが、9月1日に関東大震災で全てが灰燼に帰してしまった。この結果、2回の災害で8万円の損害が生じた。

この困難の時に、興望館の経営はブラックモアーが責任者を勤めるカナダ婦人宣教師社団(W・M・S)が引き受けることになり、その関係は1935(昭和10)年4月に財団法人日本基督教婦人矯風会に引き継ぐまで続いた。

いかなる資金繰りであったのか明確ではないが、再建に当たりブラックモアーが個人で5万円の借財を知人に背負ったという。彼女の信用で知人から借り入れたのだと思われる。その後東京府の5万円の救済費を得て漸く愁眉を開いたのであった。日本メソヂスト教会の公的な事業でないが、セツルメントにW・M・Sの宣教師が深く関わり、初期の10年間は経営の責任を持ったので、教会のセツルメントの一例であると考えて、あえて付記した。興望館の歴史には、ライシャワー夫人の回想の中で、初期の功労者としてブラックモアーの名が挙げられている。興望館の記録の中にその名がとどめられたのは年表に数カ所あるのみであり、W・M・Sの所属であった事は、東京府に提出した「沿革概要」の引用中に記されているが、W・M・Sとの具体的な経緯は、興望館の80年史には記されていない<sup>11</sup>。

## 終わりに

日本メソヂスト教会は1924(大正13)年から、浅草に浅草ミッションを設置した。ミッションという名称は早くから中央会堂教区の中央教会に併置する形で設けられていた。これは図書館を経営し、英語学校などの事業を行い、学生を教会に導く働きであった。しかし、浅草教会に存置する形のこのミッションは、主任としてFWヘッケルマン<sup>12</sup>が任命されているが、ヘッケルマンは青山学院神学部の教授であり、同時に渋谷講義所・鎌ヶ谷の担当(Supervisor)でもあったから、実働は浅草教会牧師真鍋頼一に任されていたと見て良い。

このミッションの働きは明確ではなく全体像を叙述できないが、婦人宣教師も加わり英語学校も開設されたという。

日本メソヂスト教会は1928年から、総会・年会の社会事業委員会の外に社会局を設けた。初代の社会局長はPGプライスであり、幹事は真鍋頼一であった。彼は教団合同まで社会局に関わり、プライスの後を受けて専任局長

となり、日本メソヂスト教会の社会事業を推進した。

日本メソヂスト教会は昭和3年から、10月半ばの聖日を社会事業デイと定め、この日を社会事業聖日として守ることで、全教会に社会事業の意識高揚と実施を迫ったのである。また教会の機関紙「教界時報」の付録として「隣人愛」を月一回発行してきたが、社会事業聖日制定後は、この頁で社会問題のみを論じていく事になっている。

1928年の東部年会で、社会局長PGプライスは第6回総会以前の4年間で回顧し、禁酒、廃娼、の戦いを列記し、「我委員会(註社会事業委員会)は東京に於て社会事業研究団を組織せり」と報告している。隣人愛から社会事業の必要性に傾斜している。そして、

(前略)

第三 我メソヂスト教会は託児所又は政府当局の喜んで援助せんとする諸種の社会事業を管理し又は責任を以て政府当局と常に合同されたきこと。

第四 隣保事業又はインステチュューショナル、チャーチの如き実践的社会事業は我メソヂスト教会或は合同ミッションに依りて凡ての大都市に於ける貧民区内に設置されたきこと。(後略)

「1928年東部年会記録96頁」

隣保事業、セツルメントを凡ての大都会のスラム街で実施する事を、プライスは求めているのである。

翌1929年の年会に於ける社会局報告は、「廓清会、婦人矯風会と共同政策を採ることに決定したのである」と述べている。昭和4年5年は日本各地で廃娼運動が盛り上がってきた時で、メソヂスト教会は積極的に運動に参画する姿勢をとったのである。この社会局報告の末尾は

本邦に於ける教会中、わがメソヂスト教会程社会事業方面に優れた諸施設を有するものは他になく、同時にまたメソヂスト教会程政府の承認を有する社会事業をもつものも亦他にないと信づる。わが社会局がこの事業遂行のために援助を乞ふ理由も亦明であると思う。

1929年「年会報告」

という文章で締め括られている。教団を挙げて社会事業に取り組んでいる姿

が見える。1935年の年会における社会局報告中に、

日本メソヂスト教会に於ける社会事業施設団体は

愛隣団、根岸会館、共励館、愛清館、愛恵学園、永坂ホーム（以上東京）  
中村愛児園、相沢託児園（以上横浜）静岡ホーム、金沢育児院、暁明館  
（大阪）、メルトンヤング記念館（長崎）、仙台穀町育児診療所、鈴蘭園  
（函館）、弘前託児所の十五ヶ所。長崎女園と広島鷹匠町託児所は廃止。

の記事がある。メソヂスト教会は全国的に社会事業を展開していた。

昭和の大恐慌の中で都市のスラム街での社会事業の他に、日本人の大部分を占める農村社会の貧困に立ち向かう、農村福音学校の活動が農村伝道委員会から社会局に移されて、農村伝道は農村セツルメントの様相を帯びる事になった。

本稿では割愛したが、日本メソヂスト教会のセツルメントは都市部にとどまらず、農村地帯でも行われた。例えば1936前後から始まった「信濃農村社会教区」<sup>13</sup>はその一例である。

#### 《参考文献》

倉長魏『加奈陀メソヂスト日本伝道概史』（1937年、教文館）

同時代史的叙述であり今日知り得ない情報が多い

本稿の日本メソヂスト教会年報及び機関誌関係資料は凡て青山学院史料センター所蔵のものを使用した。快く閲覧を許された学院と資料センターの司書諸氏に感謝する。

畏友神保伊和雄氏には炎天下を江東方面の探訪におつきあい頂き、案内して頂いたことを付記して感謝する。

（長野県短期大学 名誉教授）

<sup>3</sup> W・M・S年報。1893-94年

<sup>4</sup> 『長野県幼稚園史』

<sup>5</sup> 1858.08.25 Ontario 生 1925.06.22. Victoria で召天／学歴 B.A. Victoria Col.

按手 1886. London Conf.／来日 1887.06.01 自給宣教師(Self Supporting Band)／1910  
再来日 1920年 Saunby 病気で帰国／1921-1925 B.C.で牧師

<sup>6</sup> 1881.08.25 Manetourin Island Ontario 生／1947.04.02 金沢で召天。

学歴 B.A. 1911. Victoria Col. M.A. 1918 Victoria／按手 1912 Toronto Conf.

／1912-東京／1913-20 金沢／1920-35 東京／1935-40 名古屋／1946-47 金沢

<sup>7</sup> 小林弥太郎伝ではこの工場は彼が提供したという。

<sup>8</sup> 星野達雄著『その生涯は水晶の如く』

<sup>9</sup> 1878.08.6 モントリオール／1973.09.15 トロントで召天。1902年ビクトリア大学卒／

1905 献身(W・M・S加入)／1907-10 山梨英和／1910-14 東洋英和／1914-17 東京／1918-19 年金沢／1919-40 年東京／1940.7.16 離日。

<sup>10</sup> Isabella Slade Blackmore 1863.1.7 Osalow NSC に生。1942.1.2. 召天。学歴 Normal

school NSC Truro. 1889 W・M・S 加入／1889.8.27 来日／1890-91、1896-1900、

1904-12、1922-25 まで4回東洋英和女学校長。この間山梨英和女学校長、静岡

英和女学校理事等を歴任。1918-1925 まで東京女子大学理事長。1895-1923 まで

カナダメソヂスト教会婦人宣教師協会管理者。日本基督教婦人矯風会理事。

<sup>11</sup> 東京東部伝道教区伝道師任命表

1926年 主任 E.G.バット

亀戸教会 ○磯部久作 東京府亀戸町4-9

吾嬭教会 前川 清 東京府吾嬭町請地387

根岸教会 山口菊太郎 下谷区下根岸106

日暮里愛隣団 ○原野駿雄 東京府日暮里町金杉1. 502

1927年 主任 E.G.バット

亀戸教会 ○磯部久作 東京府亀戸町4-9

吾嬭教会 佐藤春吉 東京府吾嬭町請地387

根岸教会 山口菊太郎 下谷区下根岸106

日暮里愛隣団 原野駿雄 東京府日暮里町金杉1. 502

1928年 主任 P.G.プライス

<sup>1</sup> 「キングストオターズ会記事」1899年以降記述。

<sup>2</sup> 『東洋英和女学院100年史』169頁

亀戸教会 ○磯部久作 東京府亀戸町4-9  
 吾孀教会 佐藤春吉 東京府吾孀町請地387  
 根岸教会 白水万里 下谷区下根岸106  
 日暮里愛隣団 同人 東京府日暮里町金杉1. 502

1929年 主任 PG.プライス

亀戸教会 ○磯部久作 東京府亀戸町4-9  
 吾孀教会 佐藤春吉 東京府吾孀町請地387  
 根岸教会 白水万里 下谷区下根岸106  
 日暮里愛隣団 同人 東京府日暮里町金杉1. 502

1930年 主任 PG.プライス E.G.バット

亀戸教会 ○磯部久作 東京府亀戸町4-9  
 吾孀教会 佐藤春吉 東京府吾孀町請地387  
 根岸教会 白水万里 下谷区下根岸106  
 日暮里講義所 ○藤田正喜 東京府日暮里町金杉1. 502

1931年 主任 PG.プライス E.G.バット

亀戸教会 ○磯部久作 東京府亀戸町4-9  
 吾孀教会 佐藤春吉 東京府吾孀町請地387  
 根岸教会 白水万里 下谷区下根岸106  
 日暮里講義所 ○藤田正喜 東京府日暮里町金杉1. 502

1932年

亀戸教会 佐藤春吉 東京府亀戸町4-9  
 吾孀教会 磯部久作 東京府吾孀町請地387  
 根岸教会 ○金沢敬次郎 下谷区下根岸106  
 日暮里講義所 ○藤田正喜 東京府日暮里町金杉1. 502  
 小岩講義所 佐藤春吉

1933年

亀戸教会 松岡貞一 東京府亀戸町4-9  
 吾孀教会 磯部久作 東京府吾孀町請地387  
 根岸教会 金沢敬次郎 下谷区下根岸106

日暮里講義所 ○滝沢四郎 東京府日暮里町金杉1. 502  
 小岩講義所 松岡貞一

1934年

亀戸教会 ○佐藤春吉 東京府亀戸町4-9  
 吾孀教会 磯部久作 東京府吾孀町請地387  
 根岸教会 金沢敬次郎 下谷区下根岸106  
 日暮里講義所 滝沢四郎 東京府日暮里町金杉1. 502  
 小岩講義所 佐藤春吉

1935年

亀戸教会 佐藤春吉 東京府亀戸町4-9  
 吾孀教会 磯部久作 東京府吾孀町請地387  
 根岸教会 金沢敬次郎 下谷区下根岸106  
 日暮里講義所 滝沢四郎 東京府日暮里町金杉1. 502  
 小岩講義所 佐藤春吉

1936年

亀戸教会 佐藤春吉 城東区亀戸町4-9  
 松井 満  
 吾孀教会 ○諸岡鉄三 向島区吾孀町西2-95  
 根岸教会 小島貞彦 下谷区下根岸106  
 日暮里教会 追 補 京府日暮里町金杉 1.502  
 教育部 佐藤周象 荒川区日暮里町三丁目 1.502 愛隣団内 小岩  
 講義所 佐藤春吉

<sup>12</sup> HECKELMAN Frederick William 1872.09.16 日ドイツ Haringe Nassau 生。  
 1882年両親とアメリカへ移民。Balwin Wallace 大卒/カリフォルニア・ノースオ  
 ハイオで按手/1906-1908 横浜で伝道/1908-23 札幌/1926-41 青山学院大/  
 1941.3.27 帰国/1947.6.28 Rosemead で召天。

<sup>13</sup> 拙稿「日本メソヂスト教会の農村伝道」『日本プロテスタント諸教派史の研究』

---

(教文館、1997刊) 所収。